Tattvārthā について

—有為は言依であるをめぐって—

松 濤 泰 雄

俱舎論は有為法の同義語の 1 つとして言依 (kathāvastu) を説き、そして「言 (kathā) とは言葉 (vākya) であり、その依 (vastu) とは名 (nāman) である。しかし義を伴う依 (sārthakavastu) を撰するから (grahaṇāt), 有為 (saṃskṛta) は言依と説かれる。そうでないならば、『言依は十八界に撰せられる。』とある品類 (足論) の本文は矛盾したものとなる。」と説明する。ところで有為法が言依となることを概説すれば、想 (saṃjñā) をつくる名 (nāman) によって有為 (saṃskṛta) を認識対象 (artha) として語ること (vākya) つまり音声 (śabda) を発することが生ずるが、無為 (asaṃskṛta) を対象としての言語活動はこの様な形にはならないということである⁽¹⁾。本稿は俱舎論安慧釈の言依をめぐる議論を、他のアビダルマ諸論書と対比させながら、1. より 6. の項目に分類して試訳したものである⁽²⁾。

T A

1. 言依の自性

(P 42a³) 言とは語 (vākya) であるなどのことが〔本論に〕あって、そのとは言の、ということであり、依とは対境あるいは依り所 (rten pa) であり、語は名として転じ名は事物 (義) を表すという様に〔本論に、Akḥ p.80, l. 24〕解釈するからである。もし名が言依であるならば、色等の蘊は言依ではなく、名は有為の蘊の一部ではないかと言うならば、この故に事物 (義) を伴った依を撰するからなどと〔本論に〕説く⁽³⁾。そして有為は言依であると説く場合に、どの様にして事物を伴った〔依〕を説くのかと言えば、(“…対境として対境を有するもの (=名) を立てるのであり、例えば論書の対境〔を有するもの〕である文字の書写されたものについて論書であるとする様なものである…”)。

2. 名依について

さらにまたどうして⁽⁴⁾名を伴った依を説くこと、これが知られるべきかと言うならば、この故に説く。〔その様にならないとすれば⁽⁵⁾〕、品類 (足論) の本文が言依は十八界に撰せられると〔説いているのと〕矛盾するのである。どうして異なる様にならないのかと言えば、(“…もし名依は事物を伴ったものと説くとすれば…”)、名は法界の一部

に撰せられるから〔矛盾するの〕である。〔だから〕言依が十八界に撰せられる様に、事物を伴った依が撰せられるのである。

3. 名と義

⁽⁶⁾さらにどうして(心)不相応(行法)である名について義(事物)が存在するのかと言えば、語は名として転ずる(P 42b)からであり、名は事物を表わすものである〔からである〕。他の者達が説く。「これを説くことによれば言となり、〔名は〕語を説くことによるからである。」⁽⁹⁾言と〔説かれている〕内で、これら言依としての名の意味はまたこの様にして理あるものとなる。言依である声(śabda)は、名と事物を語ることであり、また事物を伴った言依を説くことによって品類(足論)の本文と矛盾することはない。

経部師達が「語る」。「名は語の対境を有しているから、義を伴った依を説かなくとも、さらにまた別の言依であっても、十八界に撰せられることは適当である」⁽¹⁰⁾と。

4. 無為と言依

もし事物(義)を伴ってれば言依に撰せられるとするならば、撰せられていないもの、それについても言依の名称が存在するから、どの様にしてまたここで無為を説明するのかと言えば、經典に時に関係する言依たるものについて説く。『比丘達よ。三つのものは言依であって四はなく五はない。あるものについて見ることがまた、事物(義)に関して言となった、そして言となる、そして言となるであろうもの、〔さらに〕同様に聞くこと・望むこと・認識することがまた、事物(義)に関して言となった、そして言となる、そして言となるであろうものはそれは何かと言えば、過去(法)が言依であり、未来(法)が言依であり、現在(法)が言依である。』⁽¹¹⁾と説かれている。

「もし無為についても言となることはないことはないとするならば、何故にそれ(無為)が言依たるものであることが經典で否定されているのかと言えば、その名は事物と同時であるという理によって、(*一言依とは事物を伴った名であると〔本論等に〕註釈し、この故にある名が事物を伴ったものと説くことができるものそれが言依である場合に、名は時に関係するものであり、そして〔名が〕無為と(P 43a)関係することが同時であることは理ではないから、この故に無為は言依とはならない*)」と尊師衆賢が語る⁽¹²⁾。

5. 安慧の論評⁽¹³⁾

もしもこれがこの様であるならば(I)差別のない意味を有する〔法〕は実に〔その〕意味になる〔様な〕多くの名がある。(II)さらにまた現在の名と、過去・未来の意味と、過去に属した現在と未来に属する事物(dñōs bo)がある。また未来の〔法〕はまた現在と過去の〔法〕と同時にありえないので、有為もまた言依ではなくなってしまふ。

他の者達が説く。「あるものについて語と名と事物(義)の三つのあるもの、それが言依であるならば、無為は実に事物を有するものではあるが、語と名とがないから言依ではない。」⁽¹⁴⁾と。

ここであらゆるもの (mthah dag) が言依たるものであると得はなすが⁽¹⁵⁾、⁽¹⁶⁾「時によっては〔言依たることが〕ないので…⁽¹⁶⁾、ここでその様なものについて説かれるべきであり、時を依り所としてこの説示はあるのであるが、四と五⁽¹⁷⁾…について四はなく…⁽¹⁷⁾五はないと説くことによってあるとするならば、それは考察されるべきである。

6. 言依及び有為無為の解釈

「実に有為によって⁽¹⁸⁾無為を立てるとすれば、存在するもの(有情)と相違する〔二〕滅 (nirodha) を生ずることと言として妨げがあり、〔また〕無障礙によって虚空(無為)があるのだから、有為はまさしく言依であるけれども、その他のものは〔言依では〕ないということ説かれる⁽¹⁹⁾べきである。」⁽²⁰⁾と他の者達〔が説く〕。

「(人は)有為を⁽²¹⁾…知覚とあるいは知覚に類するものと〔説明し〕、あるいはそれ(有為)を名により知覚の行相を取り除いて説明しているが、しかし有為は極めてそれ(知覚の行相)に依止するから、質問に対しては、有為を知覚あるいは知覚に類するものである…⁽²¹⁾」とする、言が戯論であることを望んで解釈する者達は聞く者達に対して、⁽²²⁾「名によって教示するのであるから、その言依は存在しない。現起した有為と無為について、またその対境を知ることより生じた名を仮説するから、その故に、〔名には〕因の対境はないので、〔名は〕因ではない…⁽²²⁾。」と (P 43b) 主張する。

「⁽²³⁾…そうであるならば、無為にとってはそれ程の名によってその作用は存在しないことはない。有為を分別することによって、その作用がないと考えている者がいる。〔それは〕罪あるものであるから…⁽²³⁾。」と〔説く。〕⁽²⁴⁾

尊師 Āryadāsa は「有為については各々に作用を分別した行相によって〔その後に〕、名が転ずる。」とこのことを考える。

経部師達は、「名だけのものであるから、無為は言依ではない。プトガラのように。そうであるならば、ここで過去と未来(の法)についてもまた過失に落ち入ることとなる。それらを名だけのものであると言うならば、過失に落ち入ることはない。それは生じたものであり生ずるであろうものであること、それに関する想 (saṃjñā) があるからである。同様に有たることはない。」(と語る)。

他の者達が説く。「この様にして、その四番目は、言としての作用 (bya ba) がない。」

1) この言依をめぐる議論は、仏教の言語論とも関係する。その点に関しては次の2氏論文を参照した。横山紘一「仏教の言語観(一)・(二)―名義を中心として―」『国訳一切経印度撰述部・月報三蔵107・108』昭和50年、上杉宣明「阿毘達磨の言語論一名・句・文―」『仏教学セミナー』第30号、pp.26—45 昭和54年。

- 2) 使用した論書の凡例をあげよう。

Akbh: *Abhidharmakośabhāṣya*, ed. by P. Pradhan, 和訳中では〔本論〕。

TA: *Tattvārthā* by Sthiramati, 北京 No. 5875, To 42a³-43b³ (略号P);
sDe dge 東北, No. 4421, Tho 35a³-36b² (略号D); sNar thañ 壬生目録,
No. 3867, To 40b⁴-42a⁶ (略号N)。

LA: *Lakṣaṇānusāriṇī* by Pūrṇavardhana, 北京, No. 5594, Ju 27a²-27b²

SA: *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* ed. by U. Wogihara.

順正: 『阿毘達磨順正理論』巻1, 大正29巻, 332c¹⁸⁻²⁹。

顯宗: 『阿毘達磨顯宗論』巻1, 大正29巻, 780b²⁸-c³。

Tattvārthā の sNar thañ 版は成田山仏教研究所の御好意により資料として利用
することができた。関係各位に深く感謝する次第である。

○なお和訳〔 〕は訳者の補いを、() は説明及び原語を表わす。

- 30 TA TA : gsuñs so LA : smos so

- 4) SA では言の対境には2種あり nāman は sākṣādviśaya となり, artha は pāra-
mparyaviśaya となると説明する。LA はこの部分を欠く。

- 5) TA : ci ltar LA : ji ltar

- 6) LA より補った。勿論補足しないとも意味は通ずる。

- 7) LA 「もし事物を伴った依を説く場合に〔名依は〕それ(言依)とどの様に矛盾
するのと言え、もし名依が事物を伴ったものと説かないとすると」。

- 8) LA では冒頭に「どの様にして言依が十八界に撰せられる〔のか。〕とある。

- 9) この有余師説は意味不明である。LA では「これが説かれるべきものであるから
(brjod par bya byas ni) 言であり, ñag tu byed paḥi gshuñ (語をなすものの本
文)と矛盾することはない。」とある。「ñag tu byed pa」とは何か論書名を指すとも
考えられるが, 註(8)とあわせて考えると, rab tu byed pa (=Prakaraṇa, 品類足論)
の誤記とも考えられる。

- 10) 名は語と変わらないものであるから, 心不相応行法を別に立てなくとも, 語は有為
の事物を認識対象とするので, 十八界につまり五蘊に撰せられるとするものであろう。
經部では名を実体視せず, 義(事物)が了解されるような音声(語)とし, ある義を表
わすと限定された声に名の働きがあるとする。(AKbh p. 80. l. 21-p. 81, l. 3)。

- 11) この引用經典は Upāyikā (Abhidharmakośaṭīkopāyikā-nāma, 北京118巻 No.
5595, Tu 12b⁴-13a⁵; sDe dge 東北 No. 4094, Ju 11a⁶-12a¹) にも見られる。cf.
本庄良文「俱舍論所依阿含全表」, 京都, 1984, p. 2 [7]。

- 12) この衆賢説は順正理論にある。そこでは衆賢は有為法を墮世 (adhvapatita) と無為
法を離として, 有為を時 (adhvan) に関係するものとし, 無為なる義と有為なる名と
は一緒に説けないとする。(順正における無為が言依でない理由の第一)。これに相当
するLAは「理によっても名は義(事物)と同時にであるという意味が理であるから……
(以下試訳の*)」とし, 特に衆賢説とはしない。LAの言依の説明はここで終わる。

- 13) 以下安慧は有部の解釈を難ずる。(1)1つの義に対して多くの名があることがあ
る。cf 「有余師節。義少名多。於一義中有多名故。」(順正巻14, 413C³) (2)三世に属

- する事物 (義), それを過去未来の義 (認識対象) として捉え, 現在世でその法に対して名が生ずることがあるのではないか。(AKbh p. 81, l. 17) 及びこれに対する註釈 (SA p. 185, ll. 10-20, TAP, To 295a³⁻⁶)。
- 14) この説は大毘婆沙論卷15 (正蔵27卷, 74b) では世友説であり, 阿毘曇毘婆沙論卷9 (正蔵28卷, 61a) では「復有説」とある。順正理論・顯宗論は有余説とする。
- 15) ここの部分は「心不相応行法中の得の作用によれば, 一切法は言依と言える」と解釈できるが, 有部は得には一切法を言依となす様な作用があるとは説かない。
- 16) *dus* (P,N *ṣu*) *ma yin pa*.
- 17) *P lña pa kho na la bshi pa ma yin*; *D,N lña pa kho na las ma yin*.
- 18) 音写語である。還梵すると「*saṃskritenaiva*」となる。
- 19) *P mñon par brjod paḥi*; *D mñon par ḥdod paḥi*; *N mñon par bdod paḥi*.
- 20) この有余説は順正理論に類似している。「或は此の滅の故に無為を建立するが故に。契経に言う。『蘊の滅を滅と名く』と。滅は言依に非ず。言依は是蘊なり。」(順正に説かれる無為が言依でない理由の第二)。
- 21) 以下の様な音写がある。
anubhūtamanubhūtamjāṭiyam̐bātannāmnānubhābākārābyatirekeṇadyotyantadupāśrayeṇaibasāṭikenadribalasaṃskritamanubhūtamanubhūtajāṭiyam̐bā
 次の様に還梵して見た。 *anubhūtam anubhūtajāṭiyam̐ vā tam̐ nāmnānubhāvākāravatyatirekeṇa dyotyān tadupāśrayeṇaiva sātirekena dre ba la saṃskṛtam anubhūtam anubhūtajāṭiyam̐vā*
- 22) これは名はあくまでも仮説のものであり, 名は因であることは存在しないとするものか。そうであるならば, *Sa* 及び顯宗論で名を因と説いているが, それを否定していることになる。
- 23) 以下の様な音写がある。
evaṃtarhyasaṃskṛitasayannāmnāyatetataprayojanamebanabhavatyaprayojanam̐saṃskṛitabyabatschedenatadabakalpamānopāyatvāditi /
 次の様に還梵して見た。
evaṃ tarhy asaṃskṛtasya iyannāmnā yat etat aprayojanam eva na bhavaty aprayojanam̐ saṃskṛtavayavacchedena tad avakalpamāno 'pāyatvād iti /
- 24) これは何らかの論書あるいは論師説の引用である。その主張の内容がよく理解出来ない。

<キーワード> 言依, 有為, 無為, *Tattvārtha*

(大正大学講師)